慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカにおける共同体
Sub Title	Some communities in the United States : Amish village, the second annual historic communal societies conference, and new harmony
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.7 (1976. 10) ,p.591(91)- 599(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19761001-0091
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19761001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカにおける共同体

白井　厚

1. アーミッシの村
2. 第2回歴史的共同体会議
3. ニュー・ハーモニィ再訪

1. アーミッシの村

日本では「キリスト教大事典」にも記述がないほど知られていないが，Amishは，アメリカではペンスィルヴェイニア州のLancaster郡，オハイオ州のHolmes郡，インディアナ州のElkhart郡を中心に集まり，さらに遠くカナダからフロリダ州にまで分布する有名な宗派である。(1) この派の起源は，幼児洗礼を無意義としカソリックとプロテスタントの双方から迫害されたanabaptistで，その一派にオランダ人Menno Simons (1492-1559) に率いられたメノー派(Mennonites, Mennoniten) があり，成人信者の再洗礼，教会の自治，政教分離，平和主義，無抵抗主義を主張，ヨーロッパのみならずアメリカの各地に広がった。メノー派は宗教改革運動の左翼を形成し，国教制度を否認したために厳しく弾圧されつつも，教育と訓練によって教会を純化し神への接近を指向，戒律を犯した教会員を厳しく破門していったのである。このメノー派から，1693年から1697年の間にまた分かれたのがアーミッシで，メノー派は破門の厳格性を失ったとしてさらに厳しさを求める一群がスイスの牧師Jakob Amman (1644-1730) を指導者として分裂，アンマンの名を取ってアーミッシと呼ばれる。

社会思想史的に見てアーミッシが興味深いのは，彼らが自らを一般社会から隔絶し，国家権力に抵抗して自治管理を実践する一種のアナキズム的協同社会を実現したこと，その教義によって兵役を拒否し，(2) 平和主義を貫いてきたこと，19世紀までの生活様式を墨守して一種の文明批判を示していることである。彼らは，プロテスタントと同じように聖書至上主義，宗教的個人主義を取るが，プロテスタントや再洗礼派と違って厳しい信仰と質素な生活を守るために一般社会から分離した。そして国家と既成教会の双方から激しく迫害され，旧大陸ではスイスやドイツやアルザスの丘陵地帯に逃れ，William Pennが迫害された人びとを招いた時，その一部はロッテルダムからペンスィルヴェイニア州へ渡り(最初の渡米は18世紀初期)，Berks, Chester, ランカスターなどに集落をつくった。彼らは，先祖の

注(1) アーミッシの文献としてはCharles S. Rice and Roland C. Steinmetz, *The Amish Year*, Rutgers Univ. Press, New Brunswick, New Jersey, 1956. Calvin G. Bachman, *The Old Order Amish of Lancaster County*, Vol. 49, Proceedings of the Pennsylvania German Society, Frankental Library, Lancaster, Pennsylvania, 1961. Joseph W. Yoder, *Rosanna of the Amish*, Herald Press, Scottdale, Pennsylvania, 1961. William I. Schreiber, *Our Amish Neighbors*, The Univ. of Chicago Press, Illinois, 1962. John A. Hostetler, *Amish Society*, John Hopkins Press, Baltimore, Maryland, 1968. Hostetler & Huntington, *Children in Amish Society: Socialization and Community Education*, Holt, R. & W. 1972. 坂井信生「アーミシュの文化と社会——機械文明に背を向けるアメリカ人」ヨルダン社，東京，1973. がある。

(2) アナバプティストは非暴力＝無抵抗の信仰を堅持し，国家主義の抬頭によってヨーロッパで徴兵制度が一般化するとアメリカに逃れ，兵役を免除されてきた。第一次戦でアメリカにも徴兵制が布かれた時，メノー派，フッタライト派，アーミッシなどアナバプティスト諸派はこれに抵抗，クエイカー，ブレズレンとも協力して信仰を守り，今では良心的兵役拒否者 Conscientious objector として兵役を免れている。榊原巌「良心的反戦論者のアナバプティスト的系譜」，平凡社，1974年参照。兵役拒否については，ほかに日本友和会「良心的兵役拒否」，新教出版社，1967. 阿部知二「良心的兵役拒否の思想」，岩波新書，1969. などの本があるが，アーミッシには言及されていない。

信仰と生活態度をかたくなに守り，現代を特徴づける科学技術や生活習慣，特に華美な服装や贅沢な住居を悪魔の支配としてすべて忌避する。プライドを示す教会や高等教育はすべて世俗的な悪であり，魂に有害であると信じているから，彼らは教会を建てず，俗世間を改良するための伝道や慈善活動も行なわない。そしてボタンの代りにフックを用いた簡素な制服を身につけて，農業を営んでいる。こうして自動車やトラクターや電気，ガス，水道の使用を認めない保守的な派を旧派（Old Order），または名家庭で礼拝を行なうため House Amish と呼ぶのである。それに対してやや新しい要素を加え教会の建物を持つ派が1927年に分裂し，これは Church Amish，または指導者 Moses Beachy の名から Beachy Amish と呼ばれる。アーミッシはヨーロッパでは消滅したが，寛容なアメリカでは，産児制限を禁じ子供が多いこともあって信者数が増大し，旧派だけでも2万人を越えると言われる。[3]

1975年の秋10月，アメリカのヴァジニア州に滞在していた私は，ニュー・ヨークから自宅に帰る機会に少し廻り道をしてアーミッシの中心地ランカスターを家族と共に訪れた。ランカスターはフィラデルフィアの西約100キロの地にあり，人口6万弱の小都市と周辺の郡から成っている。市は独立戦争の時は13植民地中内陸部では最大と言われ，Brandywine の戦闘後1777年9月27日大陸会議がフィラデルフィアから退いて1日だけこの市に留った。1799年から1812年まで州都であり，ペンスィルヴェイニアの一中心である。アーミッシたちはこの市の東側一帯の農村に住んでいるので，まず Information Center で地図などの資料をもらい，The Willow という柳に囲まれたモーテルに止宿，Pennsylvania Dutch の食事を賞味する。ペンスィルヴェイニア・ダッチとはドイツの南西部から17，8世紀にペンスィルヴェイニア州の南東部に移住したドイツ人とスイス人の子孫で，ダッチというが実は主体はドイツ人。ただしメノーがオランダ人で，メノー派はオランダにいたためオランダの影響を受けたせいか，料理はオランダ風であった。

翌28日にいよいよアーミッシの村に入った。驚いたことに，このあたりはすっかり観光地と化し，ランカスター市を中心とする扇状に展開した地域一帯に，The Amish Farm and House（1805年建築のアーミッシの家，家畜小屋などが旧派の生活を示す），The Amish Homestead（旧派の一家が所有する71エイカーの農場），Mill Bridge Craft Village（初期ペンスィルヴェイニア・ダッチの民芸品展示，1738年につくった製粉水車の実演，鍛冶屋，ほろ馬車などの展示）などいくつもの有料見物箇所があり，4時間のバス・ツァーや Dutch Wonderland や Pennsylvania Farm Museum of Landis Vallay, Wax Museum まであるのだ。

この州に多い covered bridge を通って，まず The Amish Farm and House を見る。これは旧派の住居と農場で，住居は台所や集会室など10室を有する大きなもの。旧派の家は，交替で礼拝の場を提供しなければならないのと，子供が平均7～8人もいるので，皆かなり大きい。しかし装飾はほとんどなく，床の敷物にいたるまで手づくりで，開拓時代をしのばせるものがある。家に集る会衆は Gemeinde と呼ばれ，15～30家族，100人前後の人だから，礼拝場となる家では，家の内外を清掃し，広間の家具を動かしてベンチを運び入れ，また礼拝の後には会食があるので10数人の女性が朝早くから来て食事の準備をするなど大変だ。讃美歌合唱，祈り，説教は長く退屈のようだが，後の会食は共同体精神を養うために重要な社交である。教会がないため結婚式なども家で行なわれ，400人もの人が集って，宗教儀式は朝から昼まで，そして祝賀の宴は夜まで続くそうだ。母屋の周りには，風車，井戸，川の水力を利用したポンプ，石造の納屋，家畜小屋，馬車小屋，牧場，水車，工作場，鍛冶屋など，アーミッシの生産の場が示されている。

この建物を後にし，The Old Village Store を経て街道を車で Kitchen Kettle という商店街へ向かう途中，buggy と呼ばれる四輪の黒っぽい箱型馬車を駆るアーミッシの人たちに何度かすれ違った。馬車の窓から見えるアーミッシの男性は，黒い服を着てつばの大きな黒い帽子をかぶり，誰もがあごひげを蓄えて手綱をさばいている。彼らにとっては，自動車は不必要というだけでなく，community life を破壊するもの

注(3) *The Encyclopedia Americana*, 1976 によれば新旧両派の受洗者23000人。子供を含めると44000人（60年代）。*Encyclopaedia Britanica*, 1963 によれば旧派は約17500人。*The World Almanac & Book of Facts*, 1975 によれば，アメリカのメノー派全体で16万人，そのうち旧派は14720人，ビーチィ・アーミッシは4069人。John A. Hostetler, *Amish Life*, 1973. などの解説書には，旧派の受洗者22000人という数字が示されている。アーミッシは教会を持たないので記録が乏しいし，外部の人の調査を好まないので正確な信者数は不明。

なのだ。悠然たる馬のひづめの響きは周囲の自動車の流れと際立ったコントラストを形成し，何しろ自動車とはスピードが違うから，馬車にはバック・ミラーや方向指示器はあるのだが，街道で追突され破壊されるbuggyが多いという話は痛ましい。馬車，沿道の馬具屋，さらには周辺の農家に見られる風車，これらは皆観光用ではなくて実際の生活に不可欠のもので，19世紀以前の生活と20世紀の現実が重なりあって展開する光景は，アーミッシの村ならではのものだろう。

観光客目当てに民芸品や土産物，伝統的な食料品などを売っているキッチン・ケテルに着くと，驚くべきことにそこでは数人のアーミッシの女性が働いていた。無地の質素な制服を着，髪を中心から分けてひっつめにし，白い帽子をかぶってchow chowという名物の漬物をびんにつめたり売り場に立ったりしている商行為は，俗界との接触を断って信仰の純粋さを守ろうと言う教義とどのように調和するのか，何とも奇妙な感じを与える。彼女らの宗教が特異であればあるほど，客の好奇心を満たし観光資源としては役立つであろうが……。

観光用アーミッシを避けて，私の車は街道を離れ農村の奥深く入った。行きかう馬車の数が増え，畑では馬を使ってせっせと耕作にはげむアーミッシの姿が見られ，私の自動車は周辺の様子とはますます不調和になってきた。アーミッシはその教義によって農業を天職とし，トラクターなどの機械すら一切用いない。だが，その勤勉はよく生産性の低さを補い，彼らはしばしばアメリカ最良の農民と讃えられる。経営が安定しているのは，土地を巧みに用いて，小麦，野菜などを輪作し，堆肥を多く与えて反当収穫を高めるからだ。また土地面積は家族を支えるに足る程度（ランカスターでは1戸平均50エイカー）で，収入はさほど多くないが，自動車や電気製品などを一切持たぬ質素な生活が，彼らに豊かな貯えを許したのだろう。農場の中に建つ彼らの家は大きな二階建て数棟を有する立派なもので，ゆるやかな起伏を持つ美しい畑，点在する農家や納屋，そして風車が廻り馬車が走るさまは，印象派の絵のような静かに流れる明るい田園風景を繰りひろげる。馬車の後ろをゆっくりと走りつつ近隣の風景を眺めるうちに，一軒の家で"じゃが芋売ります"というはり紙を発見，じゃが芋を買うことによって，観光用ならぬアーミッシの夫人と話す機会も得た。アーミッシは家庭においては，ややなまりのあるドイツ語を話すので，彼らの先祖が住んだドイツのライン川上流地方における古い農村の趣きを感じさせる。

アーミッシの社会は共産主義ではないが，強い協同の理念によって支えられている。宗教的行事のみならず，農作業から家の建築に至るまで共同体成員が協同し，それによって国家権力を無用ならしめている。たとえば社会保険や年金のごときものは彼らには必要がない。彼らは税金は払うが，それに対する見返りを期待しない。すべては教区の自治で，アーミッシ全体の全国組織もない。大きな問題は教育であって，子供たちは小学校へ行くが，その後は進学せず農場と家庭で農業や家事を学ぶべきだとする。世俗的な競争や誘惑の多い高等教育は，農業を何よりも大切と考える彼らの宗教的価値観とは両立しない。彼らは子供を守り自分たちの宗教を教えるために，家庭を教室とし，また自分たちで費用を出して私設の寺小屋式小学校もつくっている。選挙などの政治には一切かかわらず，無抵抗主義から兵役も拒否し，時に国外の罹災者救護などにつくす程度だ。

しかし，テレビも映画も見ぬ彼らも俗世界の影響を免れることはできず，アーミッシの社会も変貌しつつあるようだ。特にビーチィ・アーミッシが生まれてからはこれに移る人が増え，この進歩派は服装などは旧派と同じだが，まず教会を建て，家庭では自動車を持ち電気製品を用い，礼拝にも英語を話す。他の教会のように伝道や奉仕活動も行なっている。

また外界の影響によって，全くアーミッシをやめる人もいる。外界の誘惑，高等教育を求めるなど動機はさまざまだが，アーミッシの教理が古い時代のままで厳格であればあるほど，離れる人は増えるだろう。また農産物の販売などにおいて外の経済変動の波に洗われれば，彼らの勤勉をもってしても経営が困難になることがあるし，何よりも多数の子供に土地を用意することにも限界があろう。

さながらタイム・マシーンのように，神と自然と人間の接する19世紀以前の生活を繰り広げ，徴兵制度や国民教育制度，社会保険制度などをも頑固に拒否するアーミッシの存在を許容することは，アメリカ社会の多様性，そして自由な伝統を示すものと言える。ヨーロッパで消滅したアーミッシという特異な集団が，アメリカでは生きのびたのみならず繁栄していることは，その意味でアメリカ的自由の一象徴と言える。しかし同時に，世俗社会との決別，分離を宣言したアーミッシの村の周辺にモーテルが立ち並び，観光用アーミッシまで生むに至ったさまは，多様な伝統を許容しつつ

もそれを呑みつくす資本主義の強大さを示し，資本主義に反抗して歴史的な共同体が生き残ることの難しさを痛感せしめるものがあった。

2. 第2回歴史的共同体会議

先に簡単に紹介したことのある[4]歴史的共同体会議の第2回年次大会が，1975年11月6,7,8日にケンタッキィ州 Pleasant Hill というシェイカーの村で催されたので，このたびは家族と共にこれに出席した。ケンタッキィというと，すぐ南北戦争における北のリンカーン，南の Jefferson Davis 両大統領を思い起こさせるが，私には探検史が興味深い。私が住んだヴァジニア州アルブマール郡の医師 Thomas Walker がアパレイチアン山脈の Cumberland Gap を 1750 年に発見し Daniel Boone などがそこを通って入ってきているし，Mary Wollstonecraft の夫であった謎の男 Gilbert Imlay (1754-1828) の活躍舞台だからだ。イムレイは独立戦争に短期間参加した陸軍中尉（後に大尉と称する）で，戦後ケンタッキィで測量師となり土地の投機に従事，広い調査にもとづいて書かれた *A Topographical Description of the Western Territory of North America, containing a succinct account of its soil, climate, natural history, population, agriculture, manners & customs*, 1792. と書簡体小説 *The Emigrants*, 3 vols., 1793. で知られ，さらにフランス革命で活躍し，ブリソー派と組んで，スペインの植民地を攻撃してルイジアナをフランスに取り戻そうと公安委員会に意見書を出して，自分もルイジアナ遠征に参加しようとした。国際的に活躍するアメリカの冒険家なのだが，ウルストクラーフトと結婚し彼女を捨てたあとのことは，ジャーズィ島で死んだとも言われるが，全くわからない[5]。彼の著書さえ実はウルストンクラーフトが書いたのだという説まで現れ[6]，若干の研究はあるが[7]，依然として謎の人物である。「北米西部地誌」は，気候，生物，人口，農業，風俗習慣，インディアンの種族，ケンタッキィの政治および法律などを記した先駆的な業績として高く評価されているのだから，彼について何か新しい資料を発見しうれば，アメリカ開拓史においても，またウルストンクラーフト研究にとっても興味あるものとなろう。そこで，West Virginia Turnpike, Charleston, Huntington を経て，ブルーグラス地帯の商業中心都市 Lexington 市に到着すると，早速1865年創立で州では最古にして最大という州立ケンタッキィ大学の図書館に飛び込み，特に重要なものはなかったが，イムレイの書のドイツ語訳などを若干の書物や雑誌を初めて目にしえた[8]。

同日夜，日本の山間の温泉地を思わせるようなうね

注(4) 拙稿「ニュー・ハーモニィの現状」，本誌68巻5号，1975年5月，pp. 64-65.

(5) ウィリアム・ゴドウィン，拙訳「メアリ・ウルストンクラーフトの思い出」，未来社，東京，pp. 150-151参照。

(6) Robert R. Hare, *The Base Indian, A Vindication of the Rights of Mary Wollstonecraft*, a thesis submitted to the Faculty of the Univ. of Delaware in partial fulfilment of the requirements for the degree of the Master of Arts, 1957. 出版されていないが，アメリカの国会図書館やハーヴァド大学図書館などで読むことができる。その要旨は，次の通り。イムレイの小説「移民」はウルストンクラーフトが「女性の権利の擁護」の続巻に使うつもりで集めた材料を用いたもので，彼女の最後の小説「女性の虐待」と実によく似ている。「移民」の中に現れた思想や姿勢は，彼女の他の著作における思想や姿勢を再現したものである。文体の本質的な特徴も，彼女の著作の文体と一致している。「北米西部地誌」も，文体，意見，姿勢において，「移民」および彼女の他の著作と一致している。この両著作の不自然さと女性的な文体，考え方も，この結論を支える。彼女は，この両著作を書く時間と動機を持っていた。

(7) Oliver Farrar Emerson, "Notes on Gilbert Imlay, Early American Writer," *PMLA*, XXXIX, 2 (June, 1924). Ralph Leslie Rusk, "The Adventures of Gilbert Imlay," *University of Indiana Studies*, X (March, 1923). 近年の言及としては，E. Flexner, *Mary Wollstonecraft, a Biography*, Penguin Books, 1973, pp. 297-8. P. M. Pénigault-Duhet, "Du Nouveau sur M. Wollstonecraft," *Etudes Anglaises*, xxiv.

(8) ケンタッキィ大にあるのは，*The Emigrants* の Dublin 版 (1794年)，そのリプリント版 *The Emigrants (1793), Traditionally Ascribed To Gilbert Imlay, But, More Probably, By Mary Wollstonecraft, a facsimile reproduction of the Dublin Edition (1794) with an introduction by Robert R. Hare*, Scholars' Facsimiles & Reprints, 1964.「北米西部地誌」の初版，3版(1797年)，ニュー・ヨーク版 (1793年)，独訳 *Nachrichten von dem westlichen lande der Nordamerikanischen freistaaten, von dem klima, den naturprodukten, der volksmenge, den sitten und gebräuchen desselben, nebst einer angabe der indianischen völkerstämme, die an den gränzen wohnen, und einer schilderung von den gesetzen und der regierung des staates Kentucky. In briefen an einen freund in England.* Aus dem englischen übers., mit vielen anmerk-

うねと曲る道をたどってプレザント・ヒル到着。ここはレキシントン市の南西40キロの丘の上にあり，シェイカーによってつくられた静かな村である。1910年 living community としての歴史は閉じられ，現在は Shakertown at Pleasant Hill, Kentucky, Inc. という法人が所有し，もとのかたちに復元し，いわゆる museum community となっている。1809年以降に建てられた27の建物のうち21が公開され，シェイカーたちの生活や工芸品製作が見られるわけだ。

この静寂の地に60人の人が集ったため，村はにわかに活気を帯び，人びとは夜の食堂に導かれた。19世紀そのままにろうそくの光程度の薄暗い食堂でシェイカーの料理を口にしていると，昨年インディアナ州で知り合った Donald E. Pitzer インディアナ州立大学歴史科主任教授や Historic New Harmony Inc. の Glenn 夫人など，懐しい人たちの顔が薄闇の中から現れ，遠来の珍客としていろいろの人に紹介されて，私たち家族もたちまちにして歴史的共同体の仲間入りをすることとなった。

会議の日程は次のごとくである。

11月6日夜

ピッツァ教授とプレザント・ヒル代表の挨拶。ニュー・ハーモニィの復元状況とプレザント・ヒルの歴史を映画によって説明。

7日

報告"シェイカー共同体を結びつける哲学"……Donald Yoder ペンスィルヴェイニア大学教授

報告"シェイカー文献に見られるシェイカー主義の本質"……Julia Neal 女史

グループ討論，村の見学など

8日

総会

報告"シェイカー紹介"……Robert F. W. Meader 氏（ニュー・ヨーク州 Old Chatham のシェイカー博物館理事）

報告"プレザント・ヒルの歴史考古学"……Donald E. Janzen センター・カレッジ教授

この会議は，歴史的共同体の研究者，現存する共同体の管理者などの学会で，今回の議論は会場地の関係から主にシェイカーの問題に集中し，清楚なシェイカーの服に身を包んだ美女が歌うシェイカーの歌を聞いたり，シェイカーの映画を見たりしたのも楽しい思い出となった。

総会においては会の名前を正式に National Historic Communal Societies Association と決定，幹事，評議員などを選出した（代表幹事はピッツァ教授）。また Center For Communal Studies の設立が承認され，これはインディアナ州立大学の Division of Social Science と Southern Indiana Regional Archives に置かれて，共同体関係の資料収集，文献の発行などを行なうこととなった。第3回の会議は，本年11月にペンスィルヴェイニアの Ambridge にある Old Economy で行なわれる。これはオウエンにハーモニィの地を売った Georg Rapp たちが三度目の共同体をつくったところだ。

会議においては各地の代表からも短い報告があり，唯一の外国人として私も発言を求められた。そこでオウエン研究者として，オウエンはシェイカーの共産主義共同体について聞いており，それが彼に共同体を計画させる機縁となったことを語り，[9] またケンタッキィ

ungen und bestimmungen der natürlichen produkte, von E. A. W. Zimmermann, Berlin, In der Vossischen buchhandlung, 1793. またケンタッキィ大への修士論文 Katherine Megilben, *Early Kentuchy Historians, 1784-1824*, 1931. に Chapt. IV, Gilbert Imlay がある。また Samuel Wilson Library の希覯書室 Special Collection Room で *The Universal Magazine of Knowledge and Pleasure*, London, published under his Majesty's Royal Sicence(sic), という珍しい雑誌の Vol. XCIII, 1793 を見ると"A Geographical Account of the State of Kentucky in North America"という記事があり "Captain George Imlay and Mr. John Filson (sic.) の書いた a very valuable book から" としてケンタッキィの地理について長い記述が掲載されている。

注(9) オウエンは，その「自叙伝」の末尾に，"私はまた，1817年に私の他のパンフレットと共に私が公刊した「シェイカーの起源と行動概観」(*Shetch of the Origin and Proceedings of the Shakers*) に言及するのを忘れていた。北米合州国におけるこれら風変りな人たちの成功せる実践活動のこの物語は，次のことを示す。すなわち，非常に粗末な共同体の生活によってすらも，富はこんなにやすやすとすべての人びとのために創られた。そして，比較的短い期間ののちに，すべての構成員は，貨幣も価格も用いずに富裕となり，健康と慰安のために必要なすべてのものを季節に応じて規則的に供給されうるしまされるだろうということを経験から知っているので，欠乏の恐怖から解放された。そしてこの派の人びとは，個人競争制度のもとに生活している同じ位の数の人びとよりも，道徳と行動において遥かに正しいこ

に関連してイムレイとジェファスンについて触れ[10]，最後に歴史的共同体についての関心はアメリカのみならず日本にも強まっており，この会はナショナルではなく近い将来にインタナショナルなものに発展すべきであろう，と希望を述べた。最後の点はつけたりだが，出席者は強い拍手をもって賛意を表してくれた。

学会は報告会場のみならず会場外で収穫を得るものである。美しく紅葉したプレザント・ヒルの林や芝生を散策し，シェイカーの工芸品製作実演などを見ながら歩くうちに，*The American Utopian Adventure*, Porcupine Press, Philadelphia.[11]の編集者として知られるAntioch CollegeのRobert S. Fogarty氏と出会って共同体史における経済史と文学について語り，この双書の中で*By their Fruits, the Story of Shakerism in South Union, Kentucky*, 1949. を書いているSouth Unionのシェイカー村のニール女史などとも知り合った。ニール女史はイムレイ研究のためにはぜひKentucky Libraryを訪れるよう助言され，またサウス・ユニオンにわれわれを招待してくれた。また大阪の万国博覧会でアメリカ館にシェイカーの部屋が展示され，その簡潔な美しさは人工衛星・月の石という科学技術の成果を示す展示と好対称をなしたというような話をしていると，それを日本に送るにはマサチューセッツのHancock Shaker Villageが協力したということであった。こうして散策していると，思いもかけずオウエンの子孫の一人と会うことができたのである。年配の女性である彼女の名はFlorence Dale Owen Cooper Tannerという長いもので，オウエンの実質的には長男になるRobert Dale Owenの長女Florence Dale Cooperの子供Robert John Cooperの娘[12]。オウエンから数えると五代目（玄孫）で，まさに直系に当る子孫だ。早速にいろいろ尋ねたところによ

とを，今や多年にわたって証明してきたのだ。この「概観」は，付録においてリプリントされている。これらシェイカーたちの，私有財産でなく公的財産に基礎を置く共同体は，至福一千年の状態に生きる準備をするための実践における第二段階を示した。"（*The Life of Robert Owen, written by himself, with selections from his writings & correspondence*, Vol. I, London, 1857, pp. 242-3. 五島茂訳「オウエン自叙伝」，岩波文庫，1961年，422-3ページ。訳文は必ずしも邦訳によらない。以下同じ。）と書いている。この概観は *A Supplementary Appendix to the First Volume of the Life of Robert Owen, containing a series of reports, addresses, memorials, and other documents, referred to in that volume, 1803-1820*, Vol. I. A, London, 1858. に含まれ(pp. 143-154)ている。1817年は，すべての個人に恒久的な幸福を享受させるために初めて共同体建設を提案し社会主義者に転身した"An Address to the Inhabitants of New Lanark, January 1, 1816."の翌年であり，「ラナーク州への報告」に結実する彼の社会主義思想形成において，シェイカーの実践が大きな影響を及ぼしたことがうかがわれる。

"シェイカーとラッパイトという二つの共同体的宗派について，オウエンとその支持者たちは特によく知っていた。シェイカーの共同体組織（'Gospel Order'）は，集産主義の原理論よりは実践上の経験から生まれたものである。罪なき生活を送るために世俗から離れることが，共同体生活へと向かう社会的経済的結果をもたらした。私的家族を解体し独身生活を強めるのに必要な訓練は，強力に結合した共同体を発展させるのに同じように役立った。長年の間シェイカーたちは，彼らの社会主義は彼らの宗教信仰の中心的教義にとっては偶然的なものに過ぎないと考えてきた。しかし外部の人たちにとっては，シェイカー主義は，共同体主義は機能するという最も説得的な実証になった。同じ教訓が，Harmony Society（ラッパイト）の共同体がペンスィルヴェイニアからインディアナに移っても成功したことから，引き出された。1820年代から，シェイカーとラッパイトは，アメリカの意識的な共同体的伝統を促進するのに持続的に役立つような沢山の報告，記事，訪問の主題であった。1870年までにJohn Humphrey Noyesは，'シェイカーとラッパイトは……近代社会主義の真の先駆者だ'と宣言することができた。オウエンは，アメリカに来るずっと以前からシェイカーに興味を持ち，1818年にフィラデルフィアのクエイカーW. S. Warderの *A Brief Shetch of the Religious Soicety of People Called Shakers* を公刊し，後にエディンバラのGeorge Courtauldからウエスタン・シェイカーとラッパイトについての説明を受け取った。1824年11月初めてアメリカに到着して数日後，オウエンはニューヨークのNiskeyunaにあるシェイカー共同体を訪問，強い印象を得た。……アメリカにおけるオウエン主義は，このように物理的にも知的にも既成の共同体伝統の後継者であり，宗派的共同体の世俗化せる変種である。"J. F. C. Harrison, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America, the Quest for the New Moral World*, London, 1969, pp. 53-4.

注(10) イムレイとジェファスンは，地理，動植物，資源，産業，インディアンの生活などに対する関心を共有していたと言える。ジェファスンの「ヴァジニア覚え書」は，「北米西部地誌」の素材の一つであるが，イムレイは"私はジェファスンの書を読み，この最も啓蒙され仁愛の心を持った同国人が，不幸な黒人奴隷に対して恥ずべき偏見を抱いているのを見て，恥ずかしくなった。……"（*A Topographical Description*, 1797, p. 222.）と批判している。

(11) 同じ種類の双書に *Communal Societies in America, Reprint Archive of Secular and Religious Experiments in Communal Living*, N. Y., Ams Press. があり，共にシェイカーの文献をいくつか含んでいる。

(12) オウエンの子孫については，五島茂「オウエン系図」，明大「政経論叢」37巻5・6号，1969年。が詳しい系図を示し

ると，彼女はインディアナポリスで法律家の秘書をしていたが，のちニュー・ハーモニィに来て Information Centerなどで働き，また水泳の指導もした。今はニュー・ハーモニィの郊外で一人暮らし。子供の一人は惜しくも交通事故で亡くなった。彼女には非常に残念だったようで，日本の交通事故はどうか，自動車の制限速度は何マイルかというようなことをしきりに問われた。もう一人の息子と孫 David Dale Owen Tanner がいるにしても，オウエン直系の子孫は減少気味である。タナー夫人はやや太り気味で大分お腹が出ていたが，眼鏡をかけた顔はどこやら先祖オウエンに似通うおもかげを示していた。丁度この年に出版されたばかりの拙訳「社会にかんする新見解」を含む「世界の名著」続8[13]を彼女に呈し，ニュー・ハーモニィでの再会を約束する。

3. ニュー・ハーモニィ再訪

11月9日，数々の思い出を残して深まる秋のプレザント・ヒルを出発。人びとはペンスィルヴェイニアにおける翌年の会議での再会を約したが，私たちにはそれは無理であろう。オウエンの子孫夫人とグレン夫人とはニュー・ハーモニィで，ニール女史とはケンタッキィ図書館とサウス・ユニオンで，そしてピッツァ教授とはエヴァンズヴィルの大学で再び会うのを楽しみに，シェイカーの村に別れを告げた。車は Louisville を経てニュー・ハーモニィへ。途中豪雨の中でガソリンが足りなくなりハイウェイから下りてガソリンスタンドへ行くと，相憎休業。しかし通りがかりの車が親切にスタンドの店主を呼びに行き，店主は休日にもかかわらず雨の中をわざわざ車で店までやってきて，給油してくれた。その労に対して当然のことながらチップを渡すと，頑として受け取らない。殺伐な話の多いアメリカでは珍しいことで，“他人を幸福にするために全力を尽くせ”と教えたオウエンのユートウピア実験の地に近づいたなという実感が沸く。

ガソリンに余裕ができたので，まずイリノイ州へ入り廻り道をして西側からウォバッシ川の鉄橋を渡ってインディアナ州ニュー・ハーモニィへ。鉄橋の上には “Welcome to New Harmony” の字が輝き，雨上りの夕方の町はやはり美しいたたずまいでわれわれを迎えてくれた。今回はラップ派の家を客用宿舎にした Studio という家に泊めていただく。前稿で紹介した Kenneth Dale Owen夫人は芸術に関心が強く，客用宿舎には“Poet's House”や “Studio” などしゃれた名前がつけられているわけだ。

歴史的共同体会議で見たニュー・ハーモニィ復旧の映画からも想像していたことだが，ニュー・ハーモニィは前年夏訪れた時に比べると，かなり様子が変った。いくつかの建物が新たに修復され，ガソリン・スタンドなどが移動し，New Harmony Inn が完成し，会議場や Shadblow という新しいレストランが開かれるなど，かなりの資金が投入されていることがわかる。Blaffer Trust の援助のみならず，1973 年には Historic New Harmony Inc. が設立され，1974 年に Ralph Grayson Schwarz が会長となって全復旧計画を指導，U. S. Department of Housing and Urban Development も honor award を出し，Lilly Endowment も史跡保存に拠金，近くには州立公園としてHarmony Recreation Areaをつくる計画まである。特に Fauntleroy Home, Dormitory Number Two, Thrall Opera House, Labyrinth, Harmonist Cemeteryの五つは The New Harmony State Memorial, つまり州管轄の記念物となって，そのことを示す看板などが新しくいくつか建てられた。こうしてこの地は，中西部における最も重要な史跡として，1977年までに年間20万人，1985年までには年間57万人が訪れることになろうと予想されている。歴史的な建築物や史跡の保存という点では Williamsburg と似ているが，ウイリアムズバーグと違ってここは現に人びとが生活している living community であり，史跡の保存，企業の自由，町の経済発展の三つをいかに調和させるかという難問がある。

11月10日朝，町外れにあるラビリンス(迷路)で娘と遊んでからオウエン家の墓地へ。ロバト・デイル・オウエンその他アメリカに帰化しまたアメリカに生まれたオウエンの子孫たちが，Maple Hill と名付けられた小高い墓地に眠っている。実質的な長男ロバト・ディル・オウエンは新聞の編集や教育・労働・女性解放・黒人解放などの運動に活躍し，上院議員にもなって最も有名だが，墓石は 50 cm 位の高さの薄い石でごく簡素なもの。Eldest Son of Robert Owen, 1801-1877 とのみ記されている。右隣りにはその長女フローレンス・ディル・クーパー（タナー夫人の祖母）の墓石が並び，左

ているが，そこではタナー夫人の父 Robert John Cooper が抜けている。

注(13) 「世界の名著」続8，「オウエン，サン・シモン，フーリエ」，中央公論社，1975年。

隣りには妻 Mary Jane Robinson の墓石が立っていたのであろうが，wife of Robert Dale Owen と彫られたその石は一端が大きく欠け，三女 Ernest Dale Owen の墓石の上に置いたままになっているのは痛ましい。オウエンの三男 David Dale Owen の墓が最も大きく，この地にアメリカ最初の地質学研究所を建て地質学誕生のとしただけあって，Geologist の語が誇らしげに彫られている。その他オウエンと名のついた多くの墓石を見ると，オウエンの子孫があたかも一堂に会したかのごとく，ニュー・ハーモニィにまつわるユートウピアの実験，地質学研究，演劇運動，女性の活動などが思い起こされ，さながらこの国の重要な文化史の数ページを語りかけているかのように感じられる。

町に guided tourができたとのことなので，午後は Red Geranium Bookstore 横の案内所へ。この書店は共同体関係の図書を集めたユニークなもので，立派な店構へというばかりでなく奥にはレストランとバーができ，隣には案内所，映写室，事務室などがあり，文化センターとなった。先ず映写室でニュー・ハーモニィの歴史を示す映画を映すはずなのが，本日は故障とのことで早速ツアー開始。ウォシントン州から来たという女性たちと共に，オペラ・ハウス，第2号寄宿舎，Lentz House，フォーントゥラロイ・ホウムなどを一巡した。新しく公開されたのはレンツ・ハウスで，白塗りの木造二階，1820年頃ハーモニストが建てたもの。Colonial Dames of America という団体が復旧し，典型的な一軒屋におけるラップ派の生活を示している。

夕方になると，昨夏娘の友だちになった Sally と Kimの二人の子が遊びに来て，夜高等学校の体育館でバスケット・ボールの対抗試合があるから見にこないかと誘った。高校があるのはかつてラップの教会が建てられたところで，ジムはそこから道一つへだてた隣りにある。アメリカ人はバスケット・ボール狂との定評にたがわず，行ってみるとラッパイツという由緒ある名のチームが戦う試合は白熱のゲームで，サリィは短いパンツで手をふり足を踏みならしてさっそうと応援を指導，こちらは試合よりも派手な応援合戦に見とれていた。その昔ラップ派の人たちがキリストの再臨を信じ敬けんな祈りを捧げたであろう教会，しばしば危機に見舞われたオウエンの実験において村民大会が幾度も開かれついには破局にまでいたった悲劇の場所は，すぐ隣りにある。夜遅くまで歓声の轟くジムをあとにし，現代のラッパイツの活躍を祈りつつ，160年に及ぶ星霜の有為転変を省て感慨深いものがあった。

翌11日，フォーントゥラロイ・ホウムへ行って Minerva Society 関係の資料など撮影。この建物は今は州の所有となって，当時の家具調度を並べて公開されているので，往年の状況をかなり具体的に想像することができる。家の壁に並べられた会員の写真や肖像画は，いずれも男勝りな知的な強さを示し，近隣の人の嘲笑に耐えて女性だけの会を守り抜いた意志をしのばせるものがある。会長 Constance Owen Fauntleroy の写真はピアノの前に腰かけた姿で，鼻下に薄い口ひげがあるのが印象的であり，また"知こそ栄光の冠"という言葉の頭文字をあしらったバッジを誇らしげに首に下げた女性の肖像画には，Anna Jane Mann, 1842–1871 と記されていた。その他に，この会の会員章，会の憲章のコピィなどが飾られている。見終ってから次にWorkingmen's Institute へ。二度目の訪問のためどこでも顔なじみが多く，すぐ調査にかかりうるのがありがたい。早速Special Collection Room に入る。前回も述べたように綜合図書目録がないため，蔵書の全貌はわかりにくいが，カード・ボックスのインデックスには，William Maclure, David Dale Owen, Richard D. Owen, Robert Owen, Robert D. Owen, Rosmond Owen, William Owen, Thomas Say, Josiah Warren, Francis Wrightがあり，この人たちについての書物が多い。今回は特に New Harmony State Memorial Collection の中にあるミネルヴァ協会関係の資料を見せてもらった。この州所有Collection は約30個ほどの大型カートン・ボックスの中にあり，ミネルヴァ協会の憲章，付則，議事録の実物（憲章，付則，会員の署名，議事録が1冊の大型ノートに書かれており，1回の議事録はノートの⅓ないし4ページを占める），そして27人の会員一人一人について，手紙，原稿，資料，死亡記事に至るまで，各個人別に紙袋の中に入っている。

オウエン関係の資料としては，folder 1として，papers other than correspondence. memorandum of agreement on terms for purchase of Harmony, 4 pp. written entirely in Owen's hand, except F. Rapp's signiture. と説明された歴史的な契約文書や，folder 2として Documents Recording Settlement with William Maclure, 1827, May-Juneという村の共産主義実験失敗後の記録もある。こうした原資料を数多く持っていることがアメリカの図書館の一つの特徴だが，将来これらを駆使して，ニュー・ハーモニィ

の歴史に光を当てる新しい研究が生まれることだろう。

シェイカータウンで会ったオウエン子孫夫人より招待あり，案内所の隣りで映画 "New Harmony: An Example and a Beacon" を見たあと，夕方郊外の Rapture という場所に彼女の家を尋ねた。町を離れ放牧場の中を10キロほど車を走らせると数軒の集落があり，その一軒が彼女の一人住まい。先の映画の中では彼女が水着でさっそうと水泳を子供たちに教えているシーンがあったが，今は仕事もやめ，毎日ニュー・ハーモニィに通って時間を過ごしているそうだ。家は古い家に新しく増築したもので，旧式の家具に新型のプレイアーが組み込まれていたり，こった調度が並べてある。彼女は，ロバト・デイル・オウエンが，1873年つまり晩年にクリスマス記念として彼女の父(つまりロバト・デイル・オウエンの孫）に署名入りで与えた自伝 *Threading my Way*，彼女の母に宛てられたオウエンの自伝，彼女の祖母 Florence Dale Owen（ロバト・デイル・オウエンの長女で，ミネルヴァ協会の会計担当）にその母から1853年に与えられたノート，同じく祖母に与えられたsoup ladle（ひしゃく），祖母が用いていた双頭の鷲の紋入りの chocolate server，オウエンの晩年における手紙（孫たちへ，1856, Oct. 10, Sevenoaksにて，および Mary宛，1857, Aug. 1, Sevenoaks にて。Mary というのはロバト・デイル・オウエンの妻 Mary Jane Robinson であろう），ロバト・デイル・オウエンより祖父母あての手紙（April 2, 1856, ナポリにて）などを見せてくれた。

翌11日，他の家からも招かれたが残念ながら時間がなくて辞退し，昨夏訪れた Helen Elliott 女史を再訪。老体ながらも相変らず美しく，今は自伝の執筆にいそしみ，完成も間近いという。卓抜な記憶力を持ち，しかも記憶だけでは根拠がないと自戒の言葉を繰り返す彼女のことだから，ニュー・ハーモニィの近代史を体現したような彼女の自伝は，この町の歴史に実証的な新しい光を当てることだろう。

再び労働者会館に寄って，見残した新聞や資料に目を通し，Studio の宿を整理して Historic New Harmony 事務所のグレン夫人のもとに寄って別れを告げ，Evansville のインディアナ州立大学へ。そこの食堂でピッツァ歴史科主任教授夫妻と Harmony Associates の会長 Elliott 夫妻がわれわれのために昼食の宴を設けてくれた。エリオット会長はヘレン・エリオット女史の兄弟である。夫人は州立大学図書館の貴重書室担当の司書なので，ニュー・ハーモニィの史料などについて語り，ピッツァ学部長は学内の厚生施設を厨房の中に至るまで案内して見せてくれた。かくして思い出多きインディアナ州を離れ，南下して再びケンタッキィ州に入り，Owensboroを経て Bowling Green へ。目ざすは Western Kentucky 州立大学の誇るケンタッキィ図書館，そしてサウス・ユニオンのシェイカー村である。

（未完）

〔追記〕 本稿執筆後，本年8月にポーランドで行なわれた The Fourth World Congress of Rural Sociology で発表された Russell E. Lewisの working draft "Continuity and Change among the Old Order Amish: a Case Study of Amish Kinship" が送られてきた。ルイス氏によれば，アーミッシは自ら商業経営を行なうことは決してなく，時に土産物店などに雇われるだけだそうだ。アーミッシについての最近の日本語の雑誌記事には，坂井信生「自動車を拒否するアメリカ人――アーミシュ村滞在記――」，「中央公論」1975年4月号があり，また関元「アメリカの原像」毎日新聞社，1976年にも触れられている。

ニュー・ハーモニイの復元については，さらに新しい資料を得たが，それについては次の機会に述べよう。

（経済学部教授）